OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 「類似」を表わす表現形式における属性利用 ： 日本語と中国語の対照研究 |
| Author(s) | 黄, 愛玲 |
| Citation | 大阪大学, 1999, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/42020 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 4 】

| | |
|---|---|
| 氏名 | 黄 愛玲（こう あいれい） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士（言語文化学） |
| 学位記番号 | 第 14912 号 |
| 学位授与年月日 | 平成11年7月29日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当<br>言語文化研究科 言語文化学専攻 |
| 学位論文名 | 「類似」を表わす表現形式における属性利用<br>—日本語と中国語の対照研究— |
| 論文審査委員 | (主査)<br>教授 宮川 清司<br>(副査)<br>教授 春木 仁孝　助教授 坂内 千里 |

## 論文内容の要旨

人間が持つ様々な認識能力の中で「類似」を認識するというのは、重要な能力の一つであり、全ての言語使用者がこの能力を駆使して言葉を発していると考えられる。

「類似」についての先行研究の多くは、どのようなとき、我々が「類似」を感じ表現しているのか、という「類似」の発生メカニズムに注目している。「類似」を認識し利用している直喩表現は、未知な物事や表現し難いことを他の人にある程度分かりやすく的確に伝えたいとき、しばしば利用されている表現である。また、直喩は、話し手が感じた「類似」を他人に伝え、表出する表現手法であるから、言語伝達手段として有効な手段の一つでもある。

本研究は、「類似」を認識したとき使用できる表現形式に注目する。日本語では「らしい・っぽい・よう・みたい」を取り上げ、中国語では「像」を含む表現形式や「似的」を取り上げる。本研究は、これまで同じ視点から捉えられてこなかったこれらの表現形式の分析を試みるものである。

これらの言語表現は、全て既知である語彙項目（情報）と新しい情報との間に「類似」を認識したときに使われている。つまり、二つのものの間に「類似」を認識したとき、その表現形式の助けを借り他の人に自分が認識したことを伝えているのである。既知の情報の属性を抽出し新しい情報に適用していくのを助ける表現形式であるので、本研究では「属性抽出語」と呼んで扱っている。

異なる言語間に於いて、同じ分析基準を設け考察を行なうことはまた、言語間に於ける普遍性を導き出す一つの手掛かりとなる。本研究では、同一の「属性抽出」利用という観点から異なる二言語について考察した。同じ分析基準を置くことによって、言語使用の普遍性だけでなく、両言語に存在する「類似」を表わす表現に見られる共通点や相違点をより明確にし、より体系的に示し出すことを試みる。

本研究で用いた分析基準を以下に簡潔にまとめる。

先行研究からは、語彙項目に対して話者が認識する意味属性は、その言語社会に依存している以上に話し手の発話心理と深く関わり合いを持つのだということが分かる。語彙項目に対して認識する意味属性とは、その言語社会が長年にわたって、その語彙項目に対して積み重ねてきた認識である。しかし、発話として用いられるその瞬間は、発話

者の心理に全く依存した認識となるのである。

したがって、属性抽出語を使用する際、話し手が発話を行なうとき認識する情報は二種類あることになる。更に、発話に用いた意味もまた、それらの情報に対して同時に認識される。その結果、意味属性は二種類に分けて認識されると考えられる。

つまり、話し手が発話を行なうとき、「既に備え持っている知識概念」（参照点と呼ぶ）と「新しく取りこむ概念」（新規対象と呼ぶ）との二種類の情報が共存する。更に、「新規対象」と「参照点」間の関係を判断するために、話し手が認識する意味属性も二種類ある。「新規対象」であるかどうか判断するために、必要となる意味属性が「定義属性」であり、「新規対象」と「参照点」のいずれに対しても連想、想起する意味属性が「プロトタイプ属性」である。

従って、発話を行なうとき、「新規対象」に対しても、「参照点」に対しても、話し手は「プロトタイプ属性」を持っている。更に、話し手は「新規対象」が「参照点」であるかどうかを判断するために、「新規対象」と「参照点」を比較し判断を下す。その判断を下すのに用いられたのが、「定義属性」である。

本研究では、「形容」の意味として用いられている日本語と中国語の表現をそれぞれ個別に取り扱い、それぞれの言語に於ける各表現形式間の共通点及び相違点の解明を中心に考察した。

その結果、「形容」の意味として用いられているのは、両言語ともプロトタイプ属性だけであり、その属性抽出語を使用するのかを決めているのは、定義属性であるということが分かった。ただし、日本語は用いた属性抽出語だけで、新規対象と参照点の定義属性の関係が判断できるのに対して、中国語ではさほど明確にその定義属性関係が分からないという違いがある。前後の文脈によって新規対象と参照点の定義属性関係がはじめて明白になるのである。

つまり、属性抽出語を使用するとき、日本語は定義属性の関係をはっきりと認識していなければ、どの属性抽出語を選択し使用するのかを決定することが出来ない。しかし、中国語はそのように明確な定義属性関係を求めず、話し手がプロトタイプ属性の関係だけを認識すればよいのである。中国語話者が属性抽出語を使用するとき、そのほとんどの場合が、新規対象と参照点の定義属性が分離の関係にある時であるから、日本語のように明確な定義属性関係を求めないのはこのためであると考えられる。

属性利用という同一の視点から捉えることによって、これまで解明されてこなかった両言語の「類似」を表わす表現形式の相違が明らかになった。「よう・みたい」と対応する中国語表現は「似的」であり、「像」表現形式ではないのである。更に、「像」表現形式がむしろ日本語の「っぽい」表現形式と対応し、同じ属性利用関係を示している。つまり、「像」も「っぽい」も同じように定義属性関係を気にすることなく使用できる表現形式である。

第5章は、両言語の属性抽出語がともに、形容以外の意味をも生成できることに注目し、生成される意味と属性利用の関わりついて分析を行なった。

形容以外に生成される意味は「推量」や「例示」である。ここでも、新規対象と参照点の定義属性関係が、生成される意味を決定していることが明らかになった。また更に、生成される意味を作り出しているのは、プロトタイプ属性の関係であった。

したがって、生成されるいずれの意味も、まず新規対象と参照点の間にプロトタイプ属性の「類似」点を見出している関係である。更に認識される定義属性の関係が、様々な意味を生成しているのである。

その定義属性の関係は、新規対象と参照点が分離の関係を示している場合、生成されるのは「比喩」の意味となり、不明の関係を示している場合は、「推量」の意味となる。包含の関係を示している場合は、「例示」と「形容」の二つの意味を生成できるのである。「例示」の意味では、参照点が新規対象を包含していることになり、逆に、「形容」の意味では、新規対象が参照点を包含していることになる。

本研究は、「よう・みたい・らしい・っぽい・像・似的」のいずれも「属性」間の「類同」を認識する能力を利用した表現形式であることを考察した。属性抽出語と規定したように、いずれも属性を「抽出」し新たな情報（新規対象）に、その「抽出」した属性を付加して利用している働きを有しているのである。

本研究は、属性抽出語として、日本語の中でこれまで共通性があるとされていただけであった表現形式を統一的に捉え、その共通点を明確にできただけでなく、各表現形式間に存在する相違をも明確に確認できた。

また、日本語と中国語の二つの言語を扱うことにより、両言語の言語使用概念の相違の一部を解明することが出来た。対照研究にあたり、本研究では同じ分析基準を決めて分析することによって、両言語間の差異が論理的により深く考察・分析できたと言える。

その上、基準とした属性利用という共通項が両言語内にともに存在し使用されている言語概念であることも明らかになり、このことは、異なる言語間において同一の言語使用概念が存在する一例であり、人間の言語使用に於ける言語の普遍性が存在することを垣間見ることができたと考えられる。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、「類似」を表す表現形式における属性利用について、日本語と中国語との対照研究を行ったものである。「類似」についての先行研究の多くは、どのようなときに我々は「類似」を感じ表現するかという「類似」の発生メカニズムに注目しているが、本論文は「類似」を認識した時に使用できる表現形式の分析を試みるものである。ここでは、既知の情報から属性を抽出し利用していくのを助ける表現形式を「属性抽出語」と呼んで、日本語では「よう・みたい・らしい・っぽい」を、中国語では「像・似的」を取り上げている。本論文では異なる言語間に同じ分析基準を設けて考察を行うことにより、「類似」を表す表現に見られる両言語間の共通点と差異をより明確に体系的に把握するとともに、人間の言語使用における普遍性を究明する一つの手掛かりを求めることを目指している。

論文の構成と内容

第一章は、「類似」を現す表現形式を研究するに際して前提となる問題点に触れるとともに研究対象の説明を行い、本論文の導入部を成している。

第二章では、本論文で使用される分析基準・枠組みについて、先行研究を踏まえながら説明を行っている。属性抽出語を使用する際、話し手が認識する情報には「既に備え持っている知識概念」(参照点と呼ぶ)と「新しく取り込む概念」(新規対象と呼ぶ)の二種類が共存しており、更に両者の関係を判断するために話し手が認識する意味属性にも「定義属性」と「プロトタイプ属性」の二種類がある。「プロトタイプ属性」とは発話を行うときに想起される「新規対象」に対するイメージや「参照点」に対して認識内に蓄積されているイメージのことである。一方、「新規対象」が「参照点」であるかどうかを判断するために両者を比較する、その判断を下すのに用いられるのが、「定義属性」である。

第三章では、「女{のような/みたいな/らしい/っぽい}人」のように名詞を用いて形容する日本語の比喩表現について、定義属性とプロトタイプ属性の観点から考察している。日本語の属性抽出語においては、その用いられた属性抽出語だけで新規対象と参照点の定義属性の関係がわかること、即ち新規対象と参照点の定義属性の関係に合わせて属性抽出語を選んで用いなければならないことなどを、文学作品のテキストを利用した詳細なデータ分析によって実証している。具体的には、肯定形では「よう/みたい」は参照点の定義属性が新規対象の定義属性の一つ以上の否定を含意しているときしか使用できず、「らしい」は新規対象の定義属性を含意しているときしか使用できない、「っぽい」は新規対象の定義属性を含意するか否かを問題にしない、などがここで明らかにされた点である。

第四章では、日本語の比喩表現がどのように中国語の中で捉えられているかを辞書・教科書・文法書・翻訳書などによって検討することにより、中国語における属性を利用した形容表現の特色を明らかにしようとしている。更に小説及びアンケートを詳細に分析し、中国語の「像」表現形式には日本語のような定義属性の関係による明確な選択制限がないこと、プロトタイプ属性の類似を認めた際に広く使用できる表現であること、などを論証した。これらの結果を踏まえて、日中両言語とも形容の意味として用いられるのはプロトタイプ属性だけであり、類似の表現形式の使い分けを決定しているのは定義属性であること、更に「よう・みたい」と対応する中国語表現は「似的」だけであり、「像」はむしろ日本語の「っぽい」と対応し、おなじ属性利用の関係を示していること、などが明らかにされた。なお、台湾在住の200名を超える大学生を対象に行ったアンケート調査とその詳細な分析は貴重な資料となっている。

第五章では、日中両言語の属性抽出語がともに「推量」や「例示」など形容（比喩）以外の意味をも生成できることに注目し、属性を利用した表現の多義性の問題を考察している。その結果、定義属性に関して、新規対象と参照点が分離の関係を示している場合、生成されるのは「比喩」の意味となり、不明の関係を示している場合は「推量」の意味となること、また包含の関係を示している場合は「例示」と「形容（一種の比喩表現）」の二つの意味を生成できること、更に「例示」の意味では参照点が新規対象を包含していることになり、逆に「形容」の意味では新規対象が参照点を包含していることになる、などの事実が明らかにされた。

第六章では、以上の研究の成果と問題点を整理するとともに、「言語の普遍性の一片を垣間見る」という出発点における問題意識を再確認して本論文の結論としている。

総評

本論文は、認知言語学における基本的な問題である範疇論に密接に関係する比喩の問題を扱ったもので、認知的な立場からの範疇論への寄与として読める研究である。「よう、らしい、みたい、っぽい」という四つの日本語表現の分析にあたり、先行研究の多くが、従来の国語学にありがちな、非科学的でどちらかと言えば文学的な説明に陥る傾向があるのに対して、本論では定義属性とプロトタイプ属性という二種類の属性を立てたことで、組織的な説明に成功している。また、中国人用の日本語教科書における説明の不正確さについての指摘や、日本語の「らしい」の中国語への翻訳に誤訳が多い原因を理論的に解明するなど言語教育的な観点からの成果も貴重なものと評価できる。中国語を扱った部分に関しては、アンケート調査などから中国語と日本語におけるこの領域のシステムの違いが明らかにされており、興味深い分析になっている。一方、中国語自体の分析は日本語の分析ほどには深められていないこと、逆に日本語に関しては、中国語では指摘されているように、共に使われる副詞表現（まるで、いかにも、ちょっと、本当に、何か、など）の役割の分析が十分になされていないことなどがやや惜しまれる点として挙げられる。また比喩と推量が常に明確に区別できるのか、区別すべきなのか、という点についての考察をも加えていればよりバランスのとれた研究となったであろう。

しかし、問題意識を明確に設定し、小さいことがらから広く大きい問題へと考察を積み重ねていく一貫した研究態度、手堅い手法で具体的な問題を丹念に論じつつそれを普遍的な問題にまで発展させようとする研究姿勢、この分野に対してなされた幾つかの具体的な貢献などの点から、本論文は従来の研究水準を越える優れたものであり、博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値のあるものと認められる。